

Special Booklet
DEREK BAILEY
DISK INDEX

工作舎編集部一編

本冊子は工作舎刊ベン・ワトソン著／木幡和枝訳『デレク・ベイリー——インプロヴィゼーションの物語』の刊行特典として、200部限定で制作された。

[2014. 1.15]

●『デレク・ベイリー——インプロヴィゼーションの物語』で取り上げられたデレク・ベイリー関連のアルバム(LP、CD、Video、DVD含む)計93枚のインデックスを本文の抜粋とともに紹介する。

●デレク・ベイリーのディスク・ガイドとしてもご活用いただきたい。

●アルバムはオリジナル盤のリリース年順に掲載した。

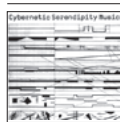
●文中、**DB**=デレク・ベイリー、**GB**=ギャヴィン・ブライヤーズ、**SL**=スティーヴ・レイシー、**PR**=ピーター・ライリー、**BM**=バリー・マクレーの発言からの抜粋。訳注の抜粋はその旨を明記した。それ以外はすべてベン・ワトソンの発言からの抜粋となる。



**Spontaneous Music Ensemble:
Karyobin**
[Island ILPS9079, 1968]

▶P.187

●**DB**:CDのリリース盤が出たとき、僕はジョン・スティーヴンスに「白人好みのフリー・ジャズ」だと言った。何らかの手を加えたんじゃないかと思ったから。彼ははっきりとは言わなかったけれども、自分としては変えたことに満足しているようだった。いや、もともと僕はあのレコードはそんなに気に入っていなかった。



Cybernetic Serendipity Music
[ICA 01, 1968]

▶P.161

●**GB**:1968年に「サイバネティック・セレンディピティ」という展覧会があって、ヘルベルト・ブリュンの曲を何曲か演奏するグループを僕が集め、デレクもギターを弾き、僕もベースを弾いた。古くさい作曲作品だったけれども。



**Tony Oxley Quintet:
The Baptised Traveller**
[CBS 52664, 1969]

▶P.196

●ブリティッシュ・ジャズはひとつとして傑作を生み出さなかったという人がいたらそれは間違いで、このアルバムを売る術をまったく知らなかったCBSの失態こそ責められるべきだろう。



**John Stevens Spontaneous
Music Ensemble:
John Stevens Spontaneous
Music Ensemble**
[Polydor/Marmalade 608008, 1969]

▶P.185

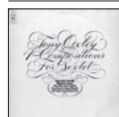
●ギターはデレクが弾いている。その後これらのレコードは非常に手に入りにくくなり、ジャズ・レコード専門店では年季の入った年寄りの店員が問合せが来るたびに苦しまぎれの愛想笑いをしていたという。



**Derek Bailey / Han Bennink:
Derek Bailey / Han Bennink
(Ijlm)** [ICP 004, 1969]

▶P.275

●『Ijlm』に表われているような、文句のつけようのない技術的、創造的パワーのある音楽がジャズ批評において埋没の憂き目に遭う今日の状況を見ると、考え込まざるを得ない。この音楽が受け入れられない理由は何だろう。ストレートな音楽の批評においてフランク・ザッパが抱えている問題に似たところがある気がする。



**Tony Oxley:
4 Compositions For Sextet**
[CBS 64071, 1970]

▶P.227

●ここに登場するミュージシャンたちはヴェーベルンもシュトックハウゼンも熟知した上で、即興による芸術としての音楽を開拓している。そこには静止した結晶の格子構造に、奏者たちが音の身振りによって彩りを付け加えているような感がある。



**Music Improvisation Company:
The Music Improvisation
Company**
[ECM 1005, 1970]

▶P.240-241

●どこか田舎に行ってレコード制作する——よくロック・グループがやっていた。僕たちも5日間でレコーディングをした。絶望的。あのレコードの音楽は月曜朝の最初の45分間の録音。だからと5日が過ぎ、ますます悪くなる。時間が足りないなんて、即興演奏の僕たちにはあり得ない。でも長過ぎて時間が余ることはある。



**Evan Parker / Derek Bailey /
Han Bennink:
The Topography of The Lungs**
[Incus 1, 1970]

▶P.250

●インカス・レコードの最初のリリースは『ザ・トポグラフィ・オブ・ザ・ラングス(両肺の地形)』で、1970年7月13日に録音したデレク、エヴァン・パーカー、ハン・ベニクのトリオだ。



**Tony Oxley:
Ichnos**
[RCA SF8215, 1971]

▶P.230

●このオクスリーの演奏集団はその後30年間に音楽分野に出現したあらゆる新しいものの先駆けとなった。フュージョンからバンクへ、ジョン・ゾーンの7枚組CDボックス『パラシュート・イヤーズ』の「ゲームスポーツ曲」からドラムン・ペースまで。



Spontaneous Music Ensemble:
So, What Do You Think?
[Tangent TGS 118, 1971]

▶P.248

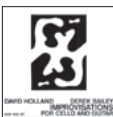
●スリーヴノートでマックス・ハリソンはこの音楽を、万華鏡の「継ぎ目のない連続性」にたとえている。ベイリーによればジョン・スティーヴンスの好きな言葉のひとつは「有機的」だったそうだ。この曲でそれぞれの奏者が言葉を投げ込み、全体としての絡み合いが生まれてくるありようには、感動的なものさえおぼえる。



Iskra 1903: Iskra 1903
[Incus 3/4, 1972]

▶P.254

●ベイリーはしょっぱな音から、聴き手に音はこうして聴いて欲しいと自分の意図を表明するような演奏をしている。あらかじめ考えておいたリズムやハーモニーを成立させるための演奏ではない、だから音は身体行為の結果として聴いて欲しいと。



Dave Holland / Derek Bailey:
Improvisations for Cello and Guitar
[ECM 1013 ST, 1971]

▶P.249

●ベイリーもホルランドもそれぞれの楽器の伝統的な特徴を放棄して、たがいの楽器の音色が共鳴し合う対話を優先しているように見える。二人の奏者が12音階の奏法で会話を楽しんでいるのは明らかだが、これは単なる突破口であり、これをとっかかりとして新たな音楽が繰り出される。



Derek Bailey / Han Bennink:
Live at Verity's Place
[Incus 9, 1972]

▶P.276

●ここでのベイリーとベニンのデュオはエキサイティングだが、『Iijm』にはあった、畏れ多いほど常軌を逸したところはない。マル・ディーンのジャケット・デザイン(ルイス・キャロルの挿絵画家サー・ジョン・テニールのスタイルを踏襲)には二人の戦士が描かれている。



Derek Bailey:
Solo Guitar
[Incus 2, 1971]

▶P.250

●インカス・レコードの2枚目はベイリーのソロ・アルバムで片面は即興演奏、もう片面では作曲された曲を演奏している(ミシャ・メンゲルベルク、ウィレム・ブロイカー、ギャヴィン・プライヤーズの曲)。



New Phonic Art 1973/ Iskra 1903 Wired:
Free Improvisation
[Deutsche Grammophon 2740 105, 1974]
3LP Box set

▶P.262

●デレク・ベイリーは「下を向いて集中しよう、御託を並べるのはやめよう、即興演奏しかない」というコンセプトそのままに、ドイツ・グラモフォンのレコーディングだからといって、高尚な文化の一端に潜り込もうといった野心をいっさい排除している。



Anthony Braxton / Derek Bailey:
First Duo Concert (London 1974)
[Emanem 601, 1974 / Emanem 4006, 1996]

▶P.290

●〈ウイグモア・ホール〉はデレクのステレオ・システムには完璧な音響空間だった。低い長音と高い短音を強調した演奏は強烈で、ネオ・オーケストラと呼びたいくらいだ。ブラクストンの「抑制のための策略」がこの『ファースト・デュオ・コンサート』総体に形(光と影)を与えたとも言えよう。



Steve Lacy:
Dreams
[Saravah SH 10058, 1975]

▶P.282

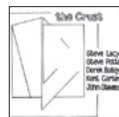
●SL:すぐにデレクの演奏に魅入られた。凄かったし、あんな演奏はそれまで聴いたこともなかった。デレクのように弾けて、ずっと退屈させない、生き生きとしたままのギター奏者は、世界中どこにもないんじゃないか。生きた時間を継続させ、聴衆を生き生きとさせ、自分も生き生きとしている。



Gavin Bryars:
The Sinking of the Titanic
[Island / Obscure No.1, 1975]

▶P.161

●GB:「イエスの血は決して私を見捨てたことはない」の最初のレコーディングで、デレクがギターを弾いた。後で彼が言うんだ。自分の演奏がらみではありえないほどの酒をあの日がぶ飲みしたって。あのレコーディングの勢いをつけて誰かに奢らせたらしいけれど。



Steve Lacy:
The Crust
[Emanem 304, 1975]

▶P.284

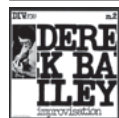
●レイシーのような確立され成功したジャズ奏者が、ベイリーやジョン・スティーヴンスのような異端者を自作の曲に使うとは、単に「へそ曲がりの行為」という観点からしてもじつに興味深い。「ザ・クラスト(仮面)」とか「フレイクス(奇人変人)」といった曲名からも、レイシーが危険をおかす覚悟をしていたことが分かる。



Christopher Hobbs / John Adams / Gavin Bryars:
Ensemble Pieces
[Island / Obscure No.2, 1975]

▶P.161-162

●GB:「1, 2, 1-2-3-4」というタイトルの曲で、適当にかき鳴らす程度だけドレクがギターを弾いている。これにはコーネリアス・カーデューも加わっていて、それが好評だった。ブライアン・イーノとかロキシー・ミュージックのアンディ・マッケイとか、いろんな連中が揃ったトラックなんだけれども、デレクは全面的に参加している。



Derek Bailey:
improvisation
[Cramps DiVerso N.2. CRSLP 6202, 1975]

▶P.311

●プログレッシヴ・ロックのグループ、アレアが資金提供し、かの地では先端を行っていたワルター・マルケッティが制作を担当したプロジェクト——最初の1日だけで驚くべき演奏を14トラック分やっつてのけた(1975年9月16日)。そして残りの3日間は、スタジオ・タイムのあいだ中ワインを飲み続けたという。